
【テキスト中に現れる記号について】

《》：ルビ

（例）私《わたし》は今大阪にいます

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）一時|逃《のが》れに

[#]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）[#地から1字上げ]（大正十一年三月）

皆さん。

私《わたし》は今大阪にいます、ですから大阪の話をしましょう。

昔、大阪の町へ奉公《ほうこう》に来た男がありました。名は何と云ったかわかりません。ただ飯炊奉公《めしたきぼうこう》に来た男ですから、権助《ごんすけ》とだけ伝わっています。

権助は口入《くちい》れ屋《や》の暖簾《のれん》をくぐると、煙管《きせる》を啣《くわ》えていた番頭に、こう口の世話を頼みました。

「番頭さん。私は仙人《せんにな》になりたいのだから、そう云う所へ住みこませて下さい。」

番頭は呆気《あつけ》にとられたように、しばらくは口も利《き》かずにいました。

「番頭さん。聞えませんか？ 私は仙人になりたいのだから、そう云う所へ住みこませて下さい。」

「まことに御気の毒様ですが、」

番頭はやっというものの通り、煙草《たばこ》をすばすば吸い始めました。

「手前の店ではまだ一度も、仙人なぞの口入れは引き受けた事はありませんから、どうかほかへ御出《おい》でなすって下さい。」

すると権助《ごんすけ》は不服《ふふく》そうに、千草《ちくさ》の股引《ももひき》の膝をすすめながら、こんな理窟《りくつ》を云い出しました。

「それはちと話が違うでしょう。御前さんの店の暖簾には、何と書いてあると御思いなさる？ 万口入《よろずくちい》れ所《どころ》と書いてあるじゃありませんか？ 万と云うからは何事でも、口入れをするのがほんとうです。それともお前さんの店では暖簾の上に、嘘《うそ》を書いて置いたつもりなのですか？」

なるほどこう云われて見ると、権助が怒るのももっともです。

「いえ、暖簾に嘘がある次第ではありません。何でも仙人になれるような奉公口を探せとおっしゃるのなら、明日《あした》また御出で下さい。今日《きょう》中に心当りを尋ねて置いて見ますから。」

番頭はとにかく一時|逃《のが》れに、権助の頼みを引き受けてやりました。が、どこへ奉公させたら、仙人になる修業が出来るか、もとよりそんな事なぞはわかるはずがありません。ですから一まず権助を返すと、早速《さっそく》番頭は近所にある医者¹の所へ出かけて行きました。そうして権助の事を話してから、

「いかがでしょう？ 先生。仙人になる修業をするには、どこへ奉公するのが近路《ちかみち》でしょう？」と、心配そうに尋ねました。

これには医者も困ったのでしょう。しばらくはぼんやり腕組みをしながら、庭の松ばかり眺めていました。が番頭の話²を聞くと、直ぐに横から口を出したのは、古狐《ふるぎつね》と云う渾名《あだな》のある、狡猾《こうかつ》な医者³の女房です。

「それはうちへおよこしよ。うちにいれば二三年|中《うち》には、きっと仙人にして見せるから。」

「左様《さよう》ですか？ それは善い事を伺いました。では何分願います。どうも仙人と御医者様とは、どこか縁が近いような心もちが致して居りましたよ。」

何も知らない番頭は、しきりに御時宜《おじぎ》を重ねながら、大喜びで帰りました。

医者は苦い顔をしたまま、その後《あと》を見送っていましたが、やがて女房に向いながら、

「お前は何と云う莫迦《ばか》な事を云うのだ？ もしその田舎者《いなかもの》が何年いても、一向《いっこう》仙術を教えてくれぬなぞと、不平でも云い出したら、どうする気だ？」と忌々《いまいま》しそうに小言《こごと》を云いました。

しかし女房はあやまる所か、鼻の先でふふんと笑いながら、

「まあ、あなたは黙っていられっしやい。あなたのように莫迦正直では、このせち辛《がら》い世の中に、御飯《

ごはん》を食べる事も出来はしません。」と、あべこべに医者をやりにめるのです。

さて明るく日になると約束通り、田舎者の権助は番頭と一しょにやって来ました。今日はさすがに権助《ごんすけ》も、初《はつ》の御目見えだと思ったせいか、紋附《もんつき》の羽織を着ていますが、見た所はただの百姓と少しも違った容子《ようす》はありません。それが返って案外だったのでしょうか。医者はまるで天竺《てんじく》から来た麝香獸《じゃこうじゅう》でも見る時のように、じろじろその顔を眺めながら、

「お前は仙人になりたいのだそうだが、一体どう云う所から、そんな望みを起したのだ？」と、不審《ふしん》そうに尋ねました。すると権助が答えるには、

「別にこれと云う訣《わけ》もございませんが、ただあの大阪の御城を見たら、太閤様《たいこうさま》のように偉い人でも、いつか一度は死んでしまう。して見れば人間と云うものは、いくら栄耀栄華《えようえいが》をしても、果《はか》ないものだと思ったのです。」

「では仙人になれさえすれば、どんな仕事でもするだろうね？」

狡猾《こうかつ》な医者の方房は、隙《す》かさず口を入れました。

「はい。仙人になれさえすれば、どんな仕事でもいたします。」

「それでは今日から私《わたし》の所に、二十年の間奉公おし。そうすればきっと二十年目に、仙人になる術を教えてやるから。」

「左様《さよう》でございますか？ それは何より難有《ありがと》うございます。」

「その代り向う二十年の間は、一文《いちもん》も御給金はやらないからね。」

「はい。はい。承知いたしました。」

それから権助は二十年間、その医者の方に使われていました。水を汲む。薪《まき》を割る。飯を炊《た》く。拭き掃除《そうじ》をする。おまけに医者が外へ出る時は、薬箱《くすりばこ》を背負って伴《とも》をする。その上給金は一文でも、くれと云った事が無いのですから、このくらい重宝《ちょうほう》な奉公人は、日本《にほん》にほん中探してもありますまい。

が、とうとう二十年たつと、権助はまた来た時のように、紋附の羽織をひっかけながら、主人夫婦の前へ出ました。そうして懇懃《いんぎん》に二十年間、世話になった礼を述べました。

「ついては兼《か》ね兼《が》ね御約束の通り、今日は一つ私にも、不老不死《ふろうふし》になる仙人の術を教えて貰いたいと思いますが。」

権助にこう云われると、閉口したのは主人の医者です。何しろ一文も給金をやらずに、二十年間も使った後《あと》ですから、いまさら仙術は知らぬなぞとは、云えた義理ではありません。医者はそこで仕方なしに、

「仙人になる術を知っているのは、おれの女房《にようぼう》の方だから、女房に教えて貰うが好《い》い。」と、素《そ》っ気《け》なく横を向いてしまいました。

しかし女房は平気なものです。

「では仙術を教えてやるから、その代りどんなむずかしい事でも、私の云う通りにするのだよ。さもないと仙人になれないばかりか、また向う二十年の間、御給金なしに奉公しないと、すぐに罰《ばち》が当って死んでしまうからね。」

「はい。どんなむずかしい事でも、きっと仕遂《しと》げて御覧に入れます。」

権助《ごんすけ》はほくほく喜びながら、女房の云いつけを待っていました。

「それではあの庭の松に御登り。」

女房はこう云いつけました。もとより仙人になる術なぞは、知っているはずがありませんから、何でも権助に出来そうもない、むずかしい事を云いつけて、もしそれが出来ない時には、また向う二十年の間、ただで使おうと思ったのでしょうか。しかし権助はその言葉を聞くとすぐに庭の松へ登りました。

「もっと高く。もっとずっと高く御登り。」

女房は縁先《えんさき》に佇《たたず》みながら、松の上の権助を見上げました。権助の着た紋附の羽織は、もうその大きな庭の松でも、一番高い梢《こずえ》にひらめいています。

「今度は右の手を御放《おはな》し。」

権助は左手にしっかりと、松の太枝をおさえながら、そろそろ右の手を放しました。

「それから左の手も放しておしまい。」

「おい。おい。左の手を放そうものなら、あの田舎者《いなかもの》は落ちてしまうぜ。落ちれば下には石があるし、とても命はありゃしない。」

医者もとうとう縁先へ、心配そうな顔を出しました。

「あなたの出る幕ではありませんよ。まあ、私に任せて御置きなさい。さあ、左の手を放すのだよ。」

権助はその言葉が終らない内に、思い切って左手も放しました。何しろ木の上に登ったまま、両手とも放してしまったのですから、落ちずにいる訣《わけ》はありません。あっと云う間《ま》に権助の体は、権助の着ていた紋附の羽織は、松の梢《こずえ》から離れました。が、離れたと思うと落ちもせず、不思議にも昼間の中空《なかぞら》へ、まるで操《あやつ》り人形のように、ちゃんと立止ったではありませんか？

「どうも難有《ありがと》うございます。おかげ様で私も一人前の仙人になりました。」

権助は叮嚀《ていねい》に御時宜《おじぎ》をすると、静かに青空を踏みながら、だんだん高い雲の中へ昇って行ってしまいました。

医者夫婦はどうしたか、それは誰も知っていません。ただその医者 of 庭の松は、ずっと後《あと》までも残っていました。何でも淀屋辰五郎《よどやたつごろう》は、この松の雪景色を眺めるために、四抱《よかか》えにも余る大木をわざわざ庭へ引かせたそうです。

[# 地から 1 字上げ] (大正十一年三月)

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987 (昭和62) 年2月24日第1刷発行

1995 (平成7) 年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971 (昭和46) 年3月～1971 (昭和46) 年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月5日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。